

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 尹 勝玟

本論文は『源氏物語』宇治十帖について、物語の織りなされ方を精緻に解明したものである。光源氏没後の物語である宇治十帖は、その近代小説的な趣によって読者を魅了し続けてきた一方で、光源氏の物語(正編)のように明確な主題がつかみにくく、主題的には空虚で散漫とさえ言われてきた。本論文では、はじめに「序論」を置いてそのような研究の現状を批判的に整理し、従来解釈に諸説を生じてきたようなテキストの多義性をこそ、作者は意図的に用いて陰翳に富んだ豊かな物語世界を織りなしているのであり、主題は明確であると主張する。本論は3部に分かれた7章から成る。

第Ⅰ部「伝承と創造」の第1章「人物造型の方法を考える—大君物語を中心に—」は、互いに距離を置くことによって心の通い合いが大切に保たれるという男女関係のあり方が、『竹取物語』や『源氏物語』正編から宇治十帖に一層主題的に深化したかたちで継承されていることを解明し、第2章「引用と想像力—「明けぐれ」を手がかりとして—」は、『万葉集』にも見られる「明けぐれ」という言葉が、物語正編を介して宇治十帖では主人公薫の「惑ひ」を象徴するような言葉になっていることを論ずる。

第Ⅱ部「方法としての多義性」の第1章「八の宮の遺言の多義性—呪縛される遺言から利用される遺言へ—」は、宇治の大君の結婚拒否について、「家門の恥となるような結婚はするな」という父宮八の宮の遺言に呪縛されたものという解釈を退け、登場人物たちがそれぞれの立場で遺言を解釈し利用している様相を解析する。第2章「多面体としての薫」は、高い精神性と俗物性、道心と愛欲といった矛盾を抱えた薫の人物造型について、互いに共感し合いながらも結ばれることのない男女関係という宇治十帖の主題が要請するところであることをこまやかに読み解き、第3章「宇治十帖後半の世界が描き出しているもの—浮舟の出家を中心に—」は、従来浮舟に還俗を勧めたものか否か解釈の分れていた横川の僧都の浮舟宛ての手紙についても、その多義性こそが物語展開の要になっているとする。

第Ⅲ部「物語の構造と表現」の第1章「浮舟物語の方法—入水の決意をめぐって—」は、入水の決意にいたるまでの浮舟の思念を丹念に解析して、従来見過ごされてきたその主体性を明らかにし、第2章「蜻蛉巻論—その位相をめぐって—」は、「中だるみ」とも称された蜻蛉巻について、大君との恋に始まる薫の惑いの生を総括し、その生に占める浮舟の位置を明らかにして、物語の終焉を準備すべく周到に構成されていることを論ずる。

テキストの「多義性」の分析になお再考の余地を残すものの、錯綜した研究状況を批判的に整理しつつ、物語の主題をこまやかにかつ明快に読み解いた成果は高く評価される。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。